

2005 フランス アヴィニオン フェスティバル オフ 掲載紙

ラ プロバンス紙 7月21日、22日掲載

日本舞踊のレディ マクベス

日本舞踊家である花柳衛菊のレディ マクベスにはちょっとした本題に入る前の序があった。

勝利を手にしたスコットランド王ダンカンが国に戻る時、3人の魔女と出会う。そして、マクベスにはスコットランド王になるとの神のお告げがある。その予言の影響からレディ マクベスは夫に圧力をかけ、マクベスはダンカンを殺すことになる。やがてレディ マクベスは正気を失い、汚れて血塗られた両手の妄想の内にむなしく死んでいく。

衛菊の舞踊の流れはいかなる言葉もはっきりした筋立てもない。総ては彼女の表現で自ずとわかる。音楽や色使いにおいても悲劇の進展は見取れる。

序は和んだ風景の雰囲気、クリアな色合、音楽もリラックスしている。しかしすばやく色は黒と赤、さらに音楽は速やかに私たちを不安状態に落とし入れる。暴力的、狂氣的アクションによって少しずつヒロインに狂気が進入する。そして、衛菊は体でその普遍性を明らかにしていく。

ラ マルセイエーズ紙 7月23日掲載

朝日の昇る国の「レディ マクベス」

3年前頃からアヴィニオン パブリック オフに日本の舞踊は浸透してきているが、花柳衛菊は完全にその世界を支配している。

今回の公演で彼女は脚色、監督、衣裳総てを受け持っている。

レディ マクベスは優美だが、性根は狼のように激しい。衛菊はシェイクスピアにある彼女の「怒りの騒音」を拒絶した。衛菊のレディ マクベスは遠い宇宙の中で進化する静寂な内的世界である。夫に殺人を強要した後の緊張も必要最小限の振りで表されている。前半に手にしている扇も雄弁である。しかし、彼女の両手だけは決して洗い流されることはないだろう。浄化されることのないアラビア風の香りのように。扇の香りを嗅ぐ微笑はあたかも謎めいたモナ・リザである。

次に舞台の空気は一変する。神からの命か、不吉な花を抱えた亡霊がゆっくりと通り過ぎて行く。犯行を刻む時を表すかのように。その後、打掛をまとい、宿命に抗う戦いが展開される。艶やかな姿に短刀を持ち、死へ向かって奔走して行くのだ。終りのエチュードは心理的に表現され、恥じらいながらも、洗練された片鱗が覗く。

衛菊のレディ マクベスは日本舞踊の規範に基づきつつも、表現は現代的で、情熱や内なる神髄を緻密に解釈した、美しい魅惑的な悲劇である。